

近江町埋蔵文化財調査集報2

——狐塚遺跡発掘調査報告書——

1996

滋賀県坂田郡

近江町教育委員会

序

近江町は、古代より近畿・東海・北陸を結ぶ交通の要衝とされ、滋賀県内においても、周知される埋蔵文化財包蔵地の多い町として知られています。なかでも狐塚遺跡は、その中心的な存在であり、第2次発掘調査で発見された帆立貝形古墳と、出土した豊富な器財埴輪の存在は、近江町の古代史を研究する上で、欠くことのできない貴重な資料となっています。しかしながら、これまで狐塚遺跡に関連する報告書は刊行されておらず、資料操作に不備をきたしていました。今般、平成7年度に第4次発掘調査を実施しましたことを契機に、過去の調査資料についても概略を公開することとなりました。この報告が、地域史研究や埋蔵文化財保護への理解と認識を深まれば、幸いです。

末筆になりましたが、同事業に御協力いただきました関係諸氏・
関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

近江町教育委員会

教育長 北川 孫一

例　　言

- 1, 本書は、近江町狐塚遺跡の発掘調査を扱った報書であり、第2次発掘調査より第4次発掘調査の調査によって出土した資料を紹介するものである。
- 2, 当該の調査は、いずれも民間開発を原因とするものであり、原因者の負担下において発掘調査が実施されたものである。これらの調査に際しては、株式会社山口不動産ならびに日動興産株式会社より多大なご援助を得た、記して謝意を表する次第である。
- 3, この報告書は、近江町の狐塚遺跡に関連する資料の公開を目的として作成した。
- 4, 調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	近江町教育委員会
調査事務局	近江町教育委員会　社会教育課
発掘調査参加者	近江町地元有志の方々
整理調査参加者	高居芳美、小野絢子、西野伊都子、柏渕紀代子、柏渕早苗、 高橋元子、小川由貴枝、中川通士、宮崎幹也

5, 本書に係る遺物の整理に関しては、主として第2次発掘調査資料を高居芳美が担当し、第4次発掘調査資料を高橋元子、小川由貴枝が担当した。

6, 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である。

赤塚次郎、赤澤徳明、石野博信、宇野茂樹、江谷 寛、大橋信弥、小笠原好彦、
柏淵宏昭、桂田峰男、鐘方正樹、河内一浩、兼康保明、葛野泰樹、近藤 滋、
白井忠雄、高橋克壽、高橋順之、田中勝弘、千賀 久、土井一行、中井 均、中井正幸、
中島和彦、西田 弘、林 純、林 博通、菱田哲郎、古野四郎、細川修平、松下 彰、
丸山龍平、森 浩一、森下章司、用田政晴、横田 宏、吉田秀則

(五十音順、敬称略)

7, 基準点測量製図業務については、株式会社イビソクならびに金城測量設計株式会社に委託して実施した。

8, 遺物写真については、寿福 滋氏（寿福写房）の手を煩わせた。

9, 本書で使用した方位は新平面直角座標系VIを基準としている。また標高はTP（東京湾平均海面高度）を用いた。

10, 本書の執筆・編集は、中川通士、高居芳美の助言を得て、宮崎幹也が担当した。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 狐塚遺跡の調査	4
第3章 第2次発掘調査の検出遺構	8
第4章 狐塚5号墳出土の埴輪	12
第5章 狐塚遺跡の出土遺物	18
第6章 第4次発掘調査の概要	20
第7章 まとめ	22

挿 図 目 次

第1図 狐塚遺跡位置図.....	1
第2図 法勝寺遺跡群と顔戸遺跡群.....	2
第3図 狐塚遺跡の各発掘調査地点.....	5
第4図 狐塚遺跡第1次発掘調査区.....	6
第5図 狐塚遺跡第2次発掘調査区.....	9
第6図 家形埴輪1実測図.....	13
第7図 家形埴輪2実測図.....	14
第8図 鞠形埴輪・盾形埴輪等実測図.....	15
第9図 太刀形埴輪・蓋形埴輪実測図.....	16
第10図 人物埴輪・鶏形埴輪実測図.....	17
第11図 鳥形木製品.....	18
第12図 狐塚遺跡出土遺物（1）	19
第13図 狐塚遺跡出土遺物（2）	20
第14図 第4次発掘調査出土遺物.....	21
第15図 塚の越古墳出土石見型盾形埴輪.....	23
第16図 法勝寺遺跡群に見られる南北地割と建物遺構.....	24

図 版 目 次

図版 1 (上) 狐塚遺跡第2次発掘調査全景

(下) 狐塚5号墳全景

図版 2 狐塚5号墳出土埴輪

報告書抄録

ふりがな	おうみちょうまいぞうぶんかざいちょうさしゅうほう							
書名	近江町埋蔵文化財調査集報 2							
副書名	狐塚遺跡発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	近江町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	宮崎幹也							
編集機関	近江町教育委員会							
所在地	〒521 滋賀県坂田郡近江町顔戸488-3 ☎0749-52-3111							
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きつねづかいせき 狐塚遺跡	しがけんさかたぐん 滋賀県坂田郡 おうみちょうたかみぞきつねづか 近江町高溝狐塚	市町村 254649	遺跡	35° 20' 30"	136° 17' 45"	19950421 ~ 19950512	1,000m ²	店舗用地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
狐塚遺跡	古墳	古墳時代	溝	須恵器 瓦				
	集落跡	平安時代		陶器 土師器				

第1章 はじめに

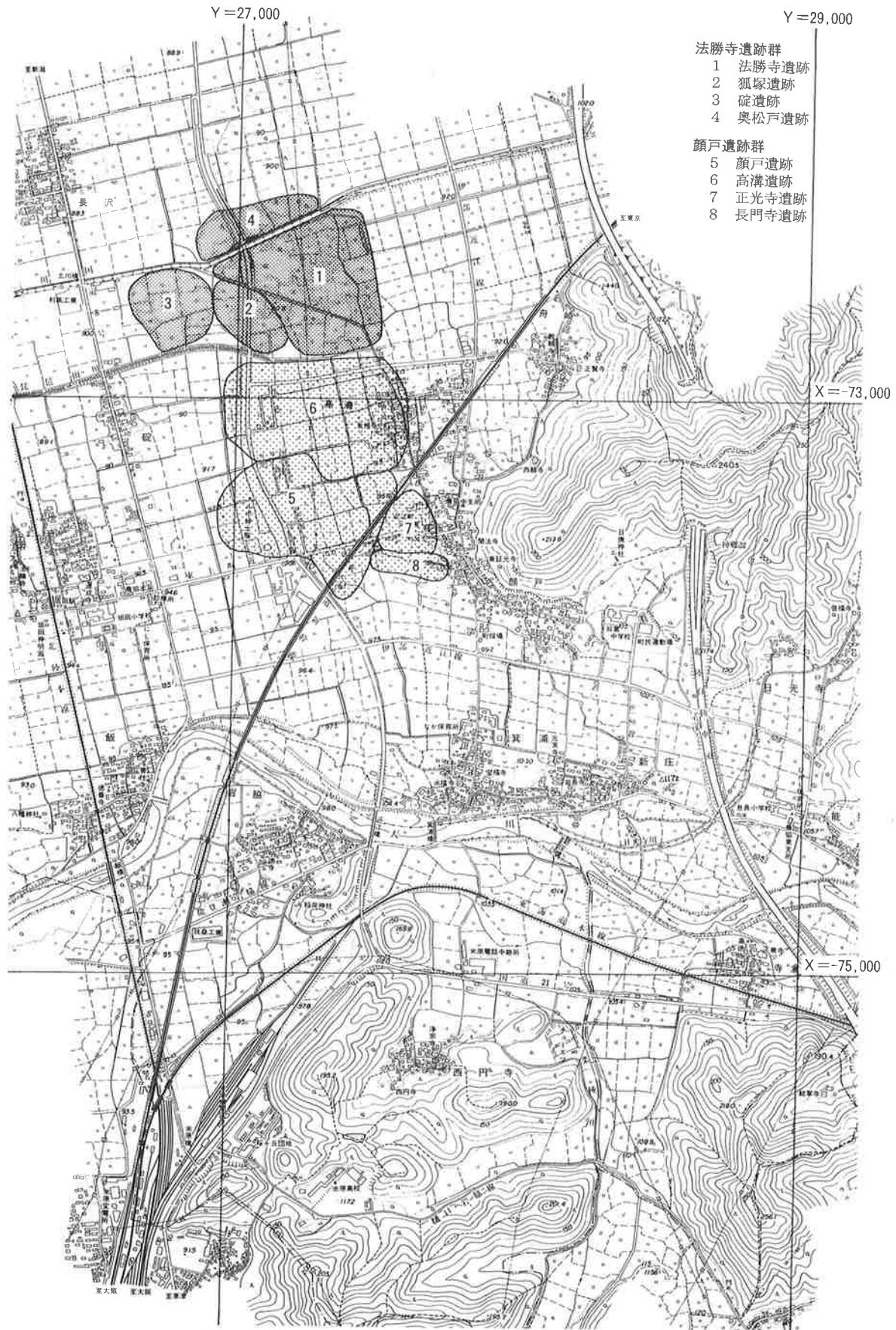
滋賀県坂田郡近江町は、琵琶湖の北東部に位置し、南北7.2km・東西5.0km・総面積18.04km²の町域を有する小さな町である。町域の北部は長浜市、南部は米原町、東部は山東町とそれぞれ接しているほか、西部は琵琶湖に面している。

町内には、現在までに合計108箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されているが、これは畿内・東海・北陸の各地域に通じる陸上交通の要衝地であるとともに、琵琶湖の朝妻湊に隣接するなど湖上交通の上でも重要な位置を占めていたことに大きく影響された結果といえよう。

今回報告を行なう狐塚遺跡は、町内の北西端部に位置しており、行政上では近江町大字高溝地先に所在する。狐塚遺跡の周辺は、遺跡の分布密度が極めて高い場所にあたり、この狐塚遺跡を中心にして、東側に法勝寺遺跡、西側に碇遺跡、北側に奥松戸遺跡・西火打遺跡・長沢遺跡を群集させ「法勝寺遺跡群」を構成させている。また狐塚遺跡の南側には、高溝遺跡・顔戸



第1図 狐塚遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)



第2図 法勝寺遺跡群と顔戸遺跡群 ($S = 1 : 20,000$)

遺跡・正恩寺遺跡・長門寺遺跡・黒田遺跡などを集め「顏戸遺跡群」を構成させている。この2つの遺跡群では、これまでに数多くの調査が繰り返され、近江町の古代史を支える多くの資料を提供している。

資料の初限期を示すものは、縄文時代早期の「高山寺式押型文土器」である。同時期の資料では、狐塚遺跡の南西6kmに米原町磯山城遺跡の出土例が知られているが、近年、北近江・西美濃における出土例が増加している。近江町では、法勝寺遺跡と狐塚遺跡から高山寺式押型文土器の出土が認められているが、いずれも遺構に伴う出土ではない。これに続く資料としては、前期から晩期に至るまでの土器が高溝遺跡を中心に出土しているが、共伴する石製品遺物の量の少ない点が注目される。特に石鏃類の出土数が少なく、動物性タンパク質の摂取法に疑問を感じざるを得ない。

弥生時代になると、条痕文系土器と沈線文系土器が融合した状態で前期の資料を提供するが、その出土量は少ない。中期の中葉になると、法勝寺遺跡群中の長沢遺跡に安定した集落が形成され、法勝寺遺跡と狐塚遺跡に「方形周溝墓」を中心とした墳墓域が構成されるようになる。長沢遺跡・法勝寺遺跡・狐塚遺跡の現在の標高は、TP+89m前後であるが、琵琶湖の平均水位が、TP+84.371mであることを考え合わせると、極めて低湿な箇所に生産地域（水田区）を設定し、集落ならびに墓域を隣接させたことが理解される。これらのうち墓域では、後期の前葉に環境変化によるとみられる一時的な埋没が認められ、後期後葉ないし古墳時代初頭期に構築される墳墓との重層関係が顕著になる。しかしながら、後期の集落については、実態が確認されておらず今後の調査に頼らざるを得ない。

古墳時代前期になると、両遺跡群を中心として環濠が構成されるようになる。これは一般的な環濠集落とは異なり、複数の遺跡を結ぶ大溝によって構成され、大溝によって囲まれた範囲に管理水田を所有する形態が復原されている。大溝は庄内期を中心を開削され、布留期に至つて「水辺祭祀」が加えられる。水辺祭祀に関連する資料としては、高溝遺跡で小型彷製鏡、黒田遺跡では木製きぬがさ等の出土が確認されている。この時期の墳墓としては、法勝寺遺跡の前方後方形周溝墓（SDX323）と、南方3kmに位置する西円寺遺跡の円形低墳丘墓（第1号墓）の存在が知られる。

古墳時代中期になると、狐塚遺跡の東側に隣接する横山丘陵南端域の尾根上に古墳の構築を開始する。定納古墳1号墳～6号墳、甲塚1号墳～2号墳などがこれに該当する。通称「息長古墳群」の発生期にあたる。また低墳丘墓の構築もこの時期まで持続し、円筒埴輪を伴う西円寺遺跡の第3号墓（帆立貝形低墳丘墓）をみることができる。

古墳時代後期になると、新庄の塚の越古墳に次いで、狐塚5号墳と同1号墳が築造され、さらに能登瀬に山津照神社古墳が築かれる。これらは「息長古墳群」の中心をなす古墳である。息長古墳群は、後期前方後円墳を中核におく古墳群であるが、「石見型盾形埴輪」をはじめとし、豊富な器財埴輪を伴うことでも注目される遺跡である。

また歴史時代になると、狐塚遺跡の東隣に白鳳寺院「法勝寺遺跡」が出現する。法勝寺遺跡の第4次発掘調査では、寺院推定地を現状保存した後、その周囲の調査を実施した。調査では、寺院に関連する遺物が出土し、寺院を取り巻く掘立柱建物や井戸などの遺構が検出された。寺院に関連する遺物は瓦類を中心であり、創建期のものと思われる7世紀代の資料と、修復期のものと思われる10世紀代の資料が出土している。

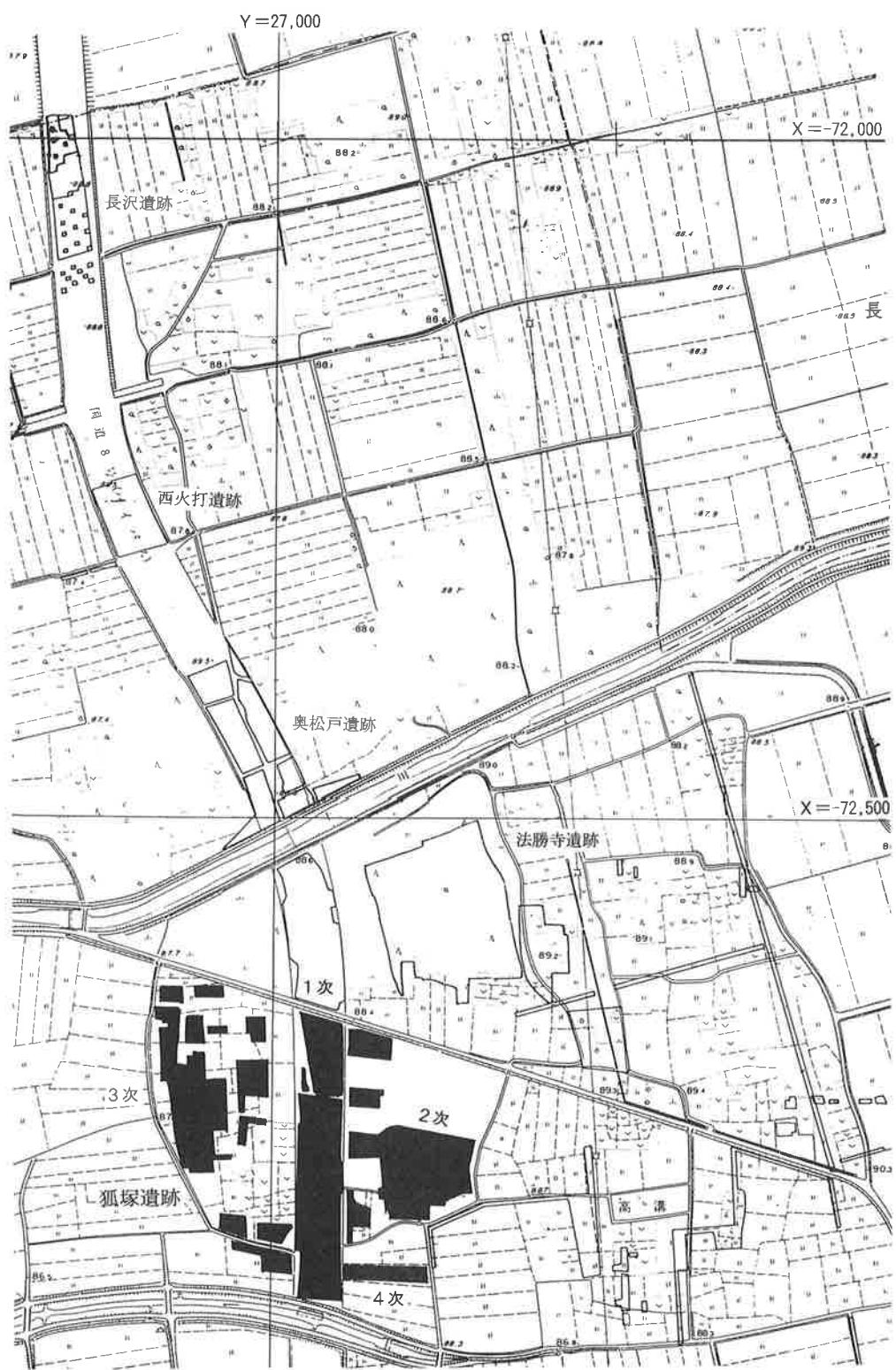
寺院の周辺には、寺院関連の遺構と主軸を異にする南北方位の遺構が広範囲に確認されている。これは水田区画に関連する畦畔・溝さらに管理建物の遺構であり、平安時代後期以降の莊園管理建物群と推定されている。これらの建物群の一部は、当然狐塚遺跡の調査範囲内にも確認することができ、寺院廃絶時に生み出した瓦片を運びだし、区画遺構の構築に利用している。

以上のように、狐塚遺跡とその周辺遺跡には、あらゆる時期の遺構が確認され、地域史解明の貴重な資料となっている。狐塚遺跡の発掘調査は、これまでに計4回が実施されているが、その資料の公開については充分であるといえない。今回、第4次発掘調査の成果を公表するに際して、過去の調査を整理し、成果の一部を公表したいと考えた次第である。なお、これらの調査については、近い将来、別の機会をもって正式な報告を計画している。

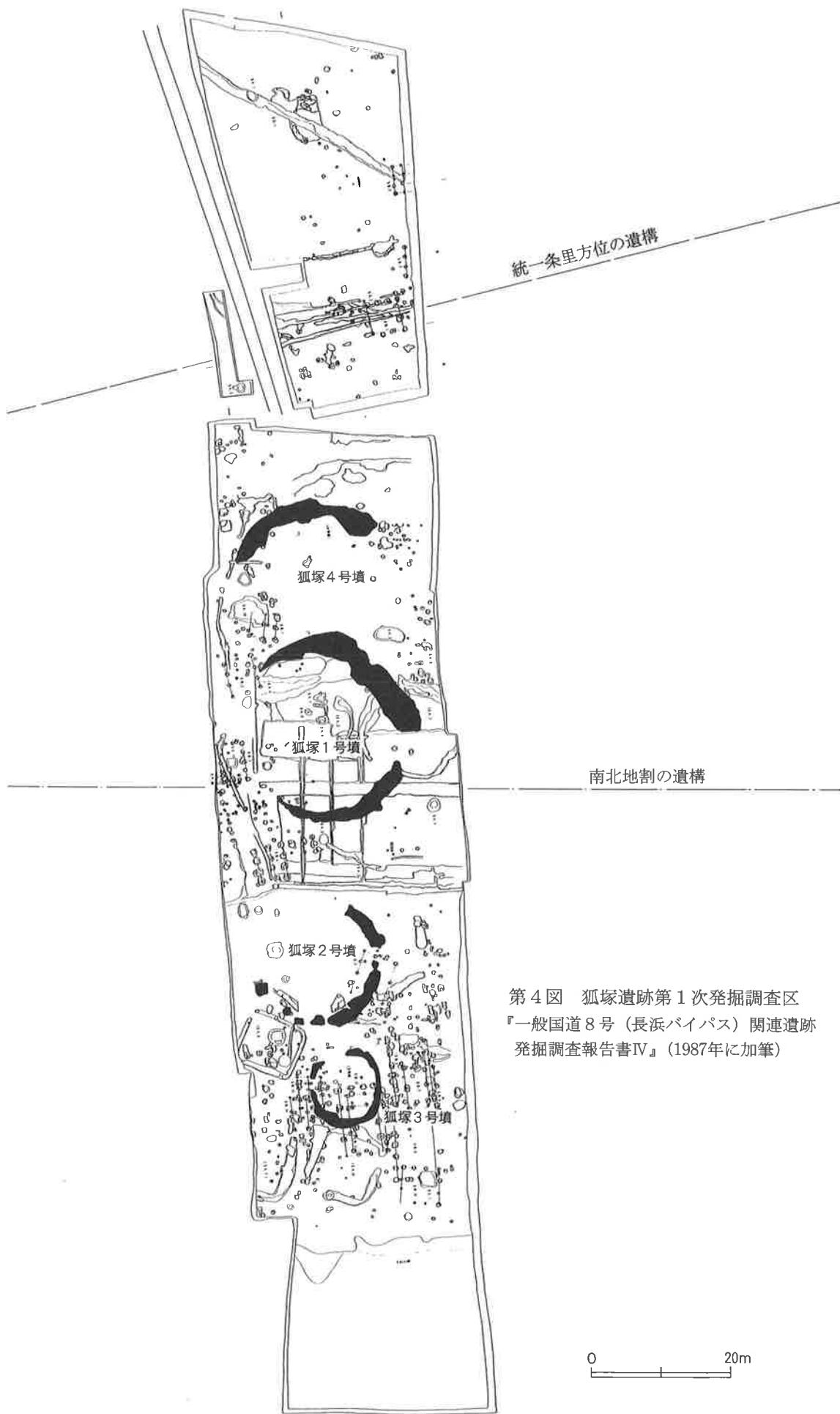
第2章 狐塚遺跡の調査

分布調査

狐塚遺跡の発見は、一般国道8号（長浜バイパス）の建設に先立つ分布調査によるものである。現在、長浜バイパスは、長浜市域の中心を南北に走り、近江町顔戸において暫定線と合流し、旧道にアクセスされているが、路線の計画段階では、丹念な分布調査が実施され、路線上のみならず周辺の遺跡についても詳細な踏査がおこなわれている。狐塚遺跡が周知されるに至ったのは、この分布調査によるものであったが、とくに近江町域においては、寺院推定地「奥松戸遺跡」の保護が重視され、計画路線を東側に迂回させる処置が講ぜられ、その代償として、法勝寺遺跡と狐塚遺跡の発掘調査が浮上したのである。既に法勝寺遺跡については、国庫補助による第1次発掘調査が実施されており、遺跡範囲と年代・性格等の概略が明らかにされていたが、狐塚遺跡については、「古墳伝承地」としての性格付けがあるものの、実態には不明な点が多かった。



第3図 狐塚遺跡の各発掘調査地点 (S = 1 : 5,000)



第4図 狐塚遺跡第1次発掘調査区
『一般国道8号（長浜バイパス）関連遺跡
発掘調査報告書IV』（1987年に加筆）

第1次発掘調査

一般国道8号（長浜バイパス）の建設に先立つ事前調査が狐塚遺跡第1次発掘調査に該当する。調査は滋賀県教育委員会と財団法人滋賀県文化財保護協会が担当し、1983年より1984年の間で実施され、1987年と1988年に報告書が刊行されている。

調査では、弥生時代の方形周溝墓、円墳4基から構成される後期古墳群、奈良・平安時代の掘立柱建物などの遺構が確認された他、白鳳寺院「法勝寺遺跡」に関連する瓦類の出土が見られた。

この調査で、確認された遺構・遺物のうちの大半は、法勝寺遺跡群の中を広範囲に拡がるものとみられるが、そのうち後期古墳に関する資料のみは、狐塚遺跡を性格付けるものとされる。調査では、後期古墳と弥生時代方形周溝墓の重層関係が認められ、報告書内における詳細な分析が、その後の調査への良質な資料提供となつた。

弥生時代の方形周溝墓は、中期後葉のものと後期中葉のものが混在した状態であったが、その際に提示された土器編年案は、長浜市鴨田遺跡発掘調査以来のものであり、畿内・東海・北陸と交流する北近江の弥生文化を考える上で極めて貴重な資料となつた。

また第1次発掘調査で確認された後期古墳の一部には、円筒埴輪および器財埴輪の出土が認められた。なかでも最も年代の古い1号墳は、6世紀前葉の円墳で、円筒埴輪・朝顔形埴輪・鞠形埴輪を伴うことが明らかとなつた。

第2次発掘調査

第1次調査の東側隣接地において、住宅地造成の計画が持ち上がり、小字「狐塚」の古墳伝承地を中心とした第2次発掘調査が実施された。調査は近江町教育委員会が担当し、1984年に実施され、1987年に概報が刊行されているものの、正式な報告書は刊行されていない。

第2次発掘調査では、全長30.0mの帆立貝形古墳が発見され、5号墳として周知されるに至った。古墳は主軸は東西方向にとり、西側に造り出し部を持つ。また、この古墳は、墳丘の覆土を全く消失した状態で検出された「埋没古墳」であるが、古墳伝承地の直下から発見されたのではなく、伝承地に隣接する水田下より発見された。

古墳の周囲には、墳形に沿って断続的な周濠が取り巻いており、周濠内部と造り出し部より多数の器財埴輪・円筒埴輪と鳥形木製品が出土した。

また古墳以外の資料としては、弥生時代の方形周溝墓、平安時代の掘立柱建物、井戸などが確認された。平安時代の遺構については、法勝寺遺跡群に拡がる一群のものと推測される。

第3次発掘調査

第2次発掘調査が実施された調査地点については、その後、調査原因となった住宅地造成が中止となり、現在は自動車販売会社が建てられている。また住宅地については、同一の原因者

が、第1次発掘調査の北西側隣接地において、再度計画されたため第3次発掘調査を実施することとなった。この地点については現在「グリーンタウン」と通称される新興住宅地となっている。

第3次発掘調査は、調査は近江町教育委員会が担当し、1986年に実施され、1987年に刊行された概報内に第1次発掘調査の成果とともに掲載されているが、正式な報告書は刊行されていない。

調査では、弥生時代の方形周溝墓が確認されたほか、縄文時代・古墳時代・奈良時代・平安時代の遺物の出土が確認された。

第4次発掘調査

第2次発掘調査地点の南側隣接地において、店舗用地の造成工事が計画され、事前に第4次発掘調査が実施された。調査は近江町教育委員会が担当し、1995年に実施された。調査では、狐塚の古墳群に関連する資料は確認されなかったものの、法勝寺遺跡群に関連する弥生時代・古墳時代・平安時代の資料と、白鳳寺院「法勝寺遺跡」に関連する遺物の出土が認められた。

第3章 第2次発掘調査の検出遺構

狐塚遺跡の調査については、これまでに第1次調査の成果が報告されているものの、他の調査については正式に報告書が刊行されておらず、出土遺物のみが一人歩きする傾向にある。そこで、特に注目される遺構（狐塚5号墳）が発見された第2次発掘調査について、その検出遺構の概略を説明し、調査機関として責務の一端を果たしたい。

第2次発掘調査においては合計4箇所の調査トレンチが設定されたが、調査の中心となったのは第5図に示した調査区である。この調査区では数多くの遺構が検出された、なかでも規模の明瞭なものとして、弥生時代の方形周溝墓3基・古墳1基・掘立柱建物6棟・井戸・土壙・素掘り溝などがある。

方形周溝墓1

調査区の最北西部で検出された弥生時代の方形周溝墓。西半部を欠損しているが南北9m40cm規模を測る。幅約1m規模の周溝が残されている。北東部のコーナーで周溝が途切れるのに対し、南東部のコーナーでは周溝が連続する。主体部は既に削平されたものと推測され、



第5図 第2次発掘調査検出遺構

位置も不明である。

方形周溝墓 2

方形周溝墓 1 の東側15mに所在する。北東の一画を消失しているものの、南北8m60cm・東西8m60cm規模を測る。幅1m50cm規模の周溝が巡るが、コーナー部分で断絶するものではない。前者と同様に主体部は消失している。

方形周溝墓 3

調査区の最南東部で検出された。北東の一画を消失しているものの、一辺10m50cmを測る。西側のコーナーが断絶している。

狐塚 5 号墳

東西に主軸を持つ帆立貝形古墳。全長30m、後円部径25mを測る。古墳の周囲には、幅2～4mの周濠が墳形に沿った形で取り巻いている。近江町に所在する「息長古墳群」は、後期前方後円墳を中心に構成されており、出土した円筒埴輪や須恵器の年代観から、6世紀初頭の塚の越古墳、6世紀前葉の狐塚 5 号墳、次いで山津照神社古墳という築造順序が推定されている。これらの古墳に共通しているのは、①東西に主軸をもつ古墳であること、②豊富な器財埴輪を出土すること、③後円部が東側にあること、④横穴式石室導入期の古墳と推定されること等である。

東西に主軸を持つのは、陽のあたる側から見た「側面観での前方後円墳」を意識付けるものと推測される。残念ながら狐塚 5 号墳については、墳丘が削平されているため、南北の構造差について詳細が不明である。器財埴輪については、塚の越古墳で、石見型盾形埴輪・家形埴輪・人物埴輪・鶏形埴輪・馬形埴輪などの一部が出土し、山津照神社古墳では石見型盾形埴輪が出土しているが、狐塚 5 号墳では造り出し部より家形埴輪・盾形埴輪・鞠形埴輪・太刀形埴輪・きぬがさ形埴輪・人物埴輪・鶏形埴輪が出土している。同時に出土した円筒埴輪や朝顔形埴輪の形状から、塚の越古墳に後出する古墳と考えられるが、器財埴輪に鞠形埴輪が残り、石見型盾形埴輪が含まれない点など、息長古墳群内における位置付けに検討を要している。

掘立柱建物 1

方形周溝墓 1 の南側で検出された建物遺構。南北3間（4m20cm）・東西3間（4m20cm）を測る総柱建物。建物主軸はN-6°-Wを示す。

掘立柱建物 2

掘立柱建物 1 の東側で検出された大がかりな掘り形の柱穴を巡らせる建物遺構。南北4間

(6 m40cm)・東西4間(6 m40cm)を測る総柱建物。建物主軸はN-10°-Wを示す。建物内部の柱間は、外側の柱間と符号せず、南北の柱数が多くなる。縁を持つ建物遺構とも推測されるが、外側の柱穴掘り形が大きく、断定しがたい。当該調査の北東側に隣接する法勝寺遺跡第4次発掘調査地点で検出したSB05・SB09と主軸方位を近似させる。

掘立柱建物3

調査区の中央北寄りで検出された南北3間(4 m50cm)・東西3間(4 m50cm)を測る総柱建物。建物主軸はN-13°-Eを示す。建物遺構の南西部が、他時期の遺構と重層しており、柱穴の掘り形などが不明である。

掘立柱建物4

掘立柱建物3の南側で検出された南北2間(2 m80cm)・東西3間(4 m80cm)を測る総柱建物。建物主軸はN-7°-Eを示す。遺構の西側で検出された素掘り小溝の方位に合致しており、水田管理に設けられた建物遺構と推測される。

掘立柱建物5

調査区の東端で検出された南北3間(4 m50cm)・東西2間(3 m50cm)を測る総柱建物。南北方向に主軸を示す。当該調査区の東側に隣接する法勝寺遺跡第4次発掘調査地点で検出したSB14・SB15と主軸方向を揃える。

掘立柱建物6

掘立柱建物5の南側で検出された南北3間(4 m80cm)・東西3間(4 m50cm)を測る遺構。南北方向に主軸を示す。遺構の北西部から中央部にかけての依存状態が悪く、総柱建物であるかどうか不明である。

これら第4次発掘調査で検出された遺構をみると、弥生時代中期後葉に方形周溝墓が構築され、6世紀の前葉に狐塚5号墳が造られるまで「墓域」としての利用がなされていたと考えられる、小字に塚名が残されることから、墓域に対する何らかの認識はあったものと推測されるが、墳丘中央部に刻まれた素掘り小溝が示すとおり、開発による水田面積の拡充が図られたことが判る。また水田については、隣接地の法勝寺遺跡調査区において、畦畔遺構や区画溝の存在が明らかにされ、この狐塚遺跡第2次発掘調査区においても大型の建物遺構や井戸跡が多数検出され、一般農村集落の経済を支えるものではなく、別個に経済投資された「寺院系莊園」等の検討が必要かと思われる。これについては、法勝寺遺跡群の周辺が長浜平野に拡がる統一條里普及地域であるのに対し、法勝寺遺跡群内のみが南北地割の水田区画・建物区画を構成す

ることからも独自の開発を認識することができよう。

第4章 狐塚5号墳出土の埴輪

狐塚遺跡第2次発掘調査で、発見された第5号墳は全長30.0mの帆立貝形古墳である。この古墳からは豊富な器財埴輪が出土した。埴輪の多くは、造り出し部を中心として出土したが、周濠内より出土したものもある。また周濠内から鳥形木製品が出土した。

家形埴輪1

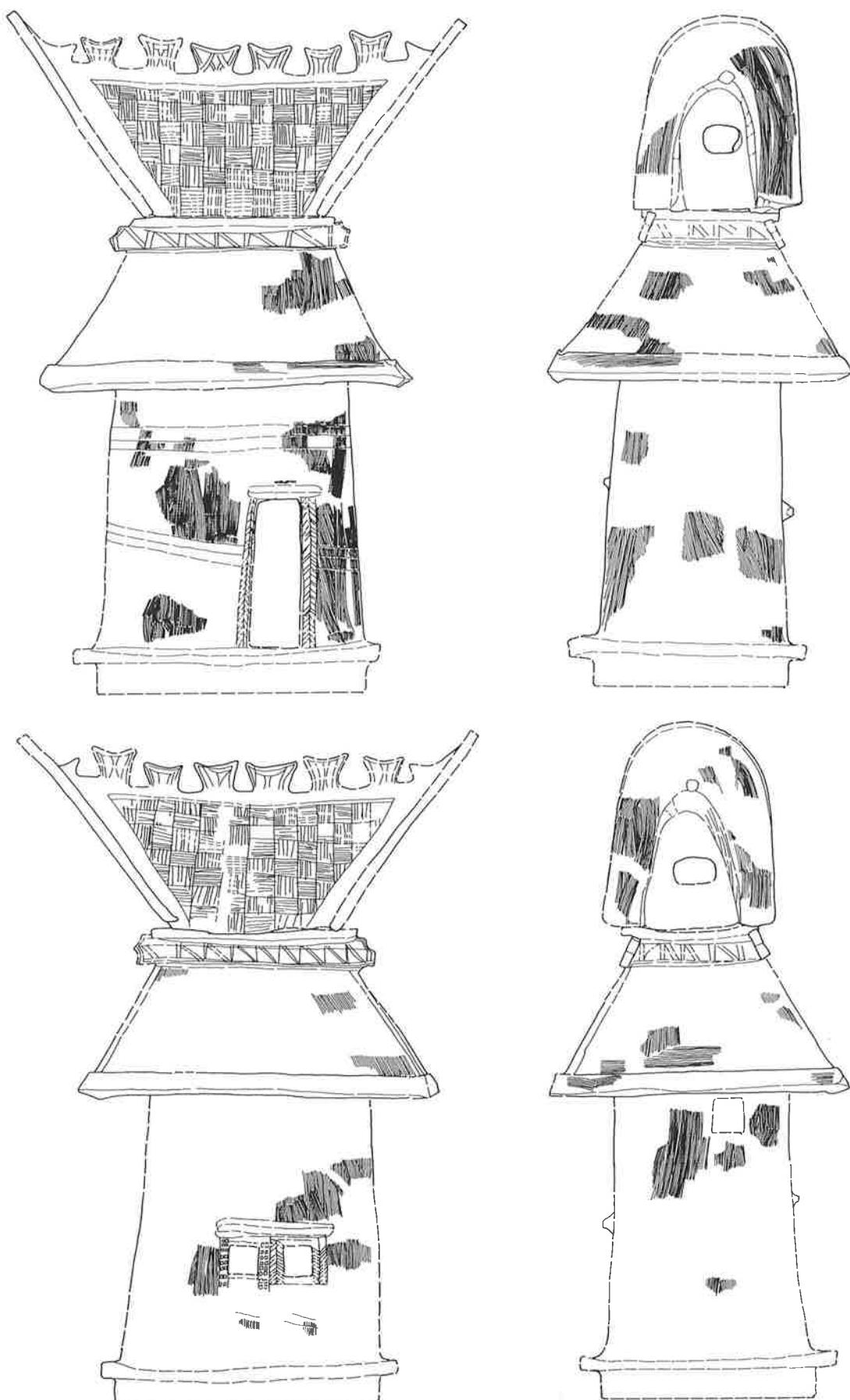
高さ92cmを測る入母造りの大型の家形埴輪。屋根部は寄棟の下屋根に破風板の付く切妻がのる、入母造りである。棟上には鰯状の突起が付く。この突起は、内側に線刻を施した魚の尾鰯状のものが6個と、その両端に三角形のものがひとつずつある。上屋根の流れには、全面に網代文様を施す。下屋根の軒には突帯がめぐらされる。壁には線刻で柱が表され、入口と思われる長方形の孔があけられている。家の下端と基底部との間には、縁板状の突帯がみられる。高さが強調され、加飾性に富む資料である。

家形埴輪2

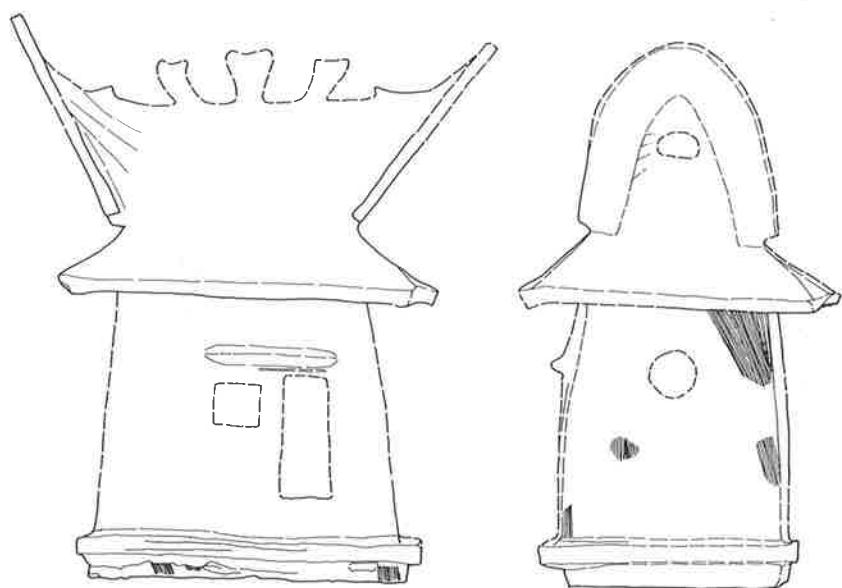
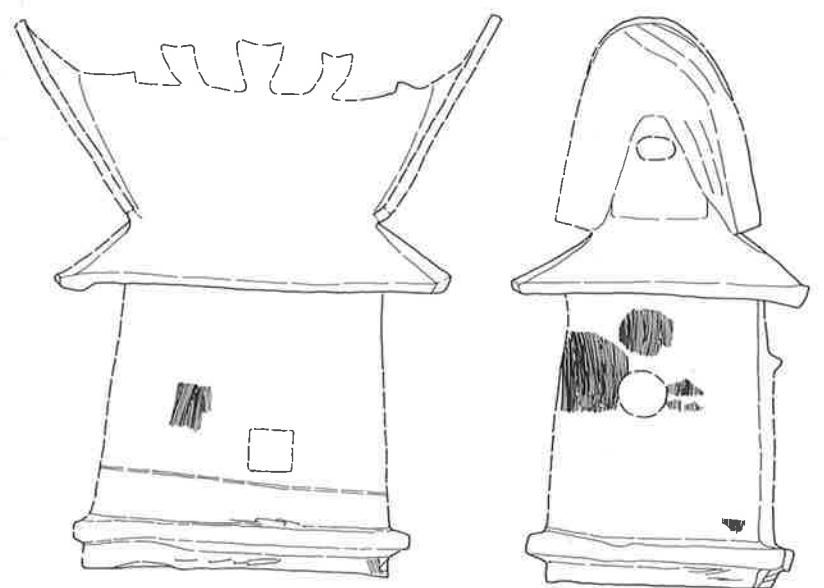
高さ60cmを測る。寄棟の下屋根に切妻の上屋根がのる、入母造りの家形埴輪である。棟上には大きく突き出す鰯状突起が3個つき、その両端にも小さな突出し部がある。妻側には大きな破風板をつける。下部構造には、窓と思われる方形の孔が比較的小さく開けられるほか、壁などを表わしたと思われる線刻がある。家と基底部の間は突帯がめぐらされる。

盾形埴輪

基底部は突帯を二条巡らし、円形の透しを入れる。盾部は、基底部から続く円筒に左右両側と、上部に粘土板を接合させ形作る。各辺は上辺が外に弧を描くのに対し、他は内側に緩やかにえぐれる。前面一帯には線刻で文様が施される。二重刻線を各辺に沿って描き、その間を短い直線で繋ぐ。その内側をⅡの字に区画し、周囲を大きな鋸歯文で、内側を対角線と円弧文で埋めている。高さ80cmを測る。



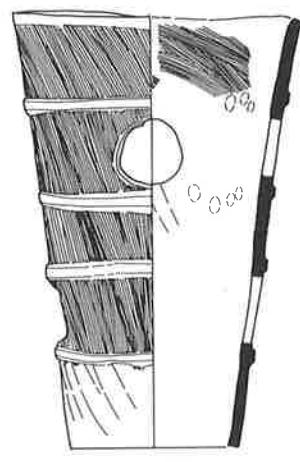
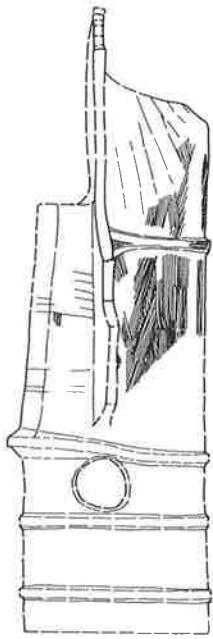
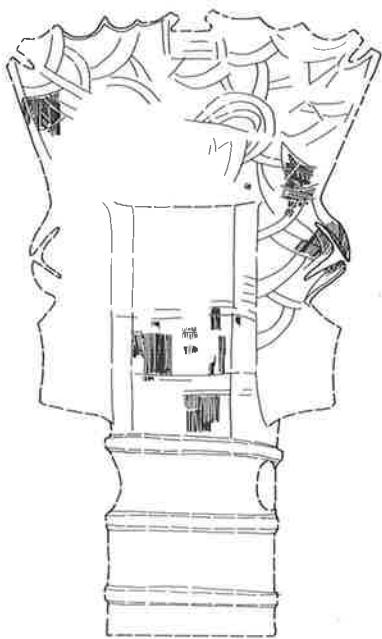
第6図 家形埴輪1実測図 ($S = 1 : 8$)



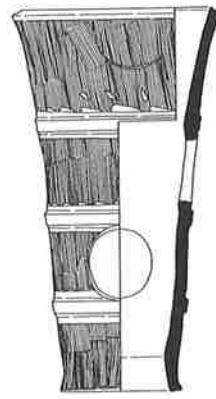
第7図 家形埴輪2実測図 ($S = 1 : 8$)

鞆形埴輪

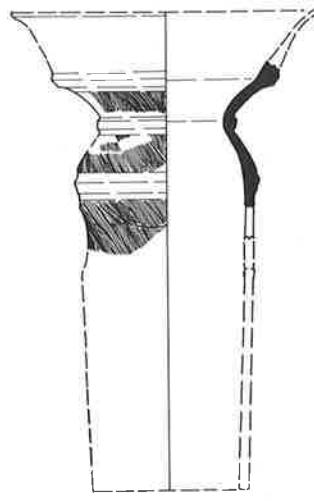
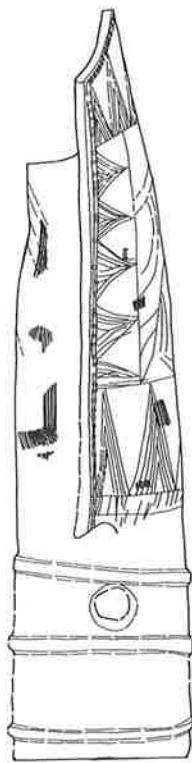
基底部は突帯が三本貼り付けられる円筒部に鞘部本体が接合される。矢を入れる筒部は箱形となるもので、その周囲に大きな背板が付く。背板は上部が逆台形となり、まわりに縁飾りを施す。鞘部全面には、線刻で直弧文等が描かれるなど、古いタイプの鞘形と想定される。高さ65cmに復原される。



円筒埴輪 1

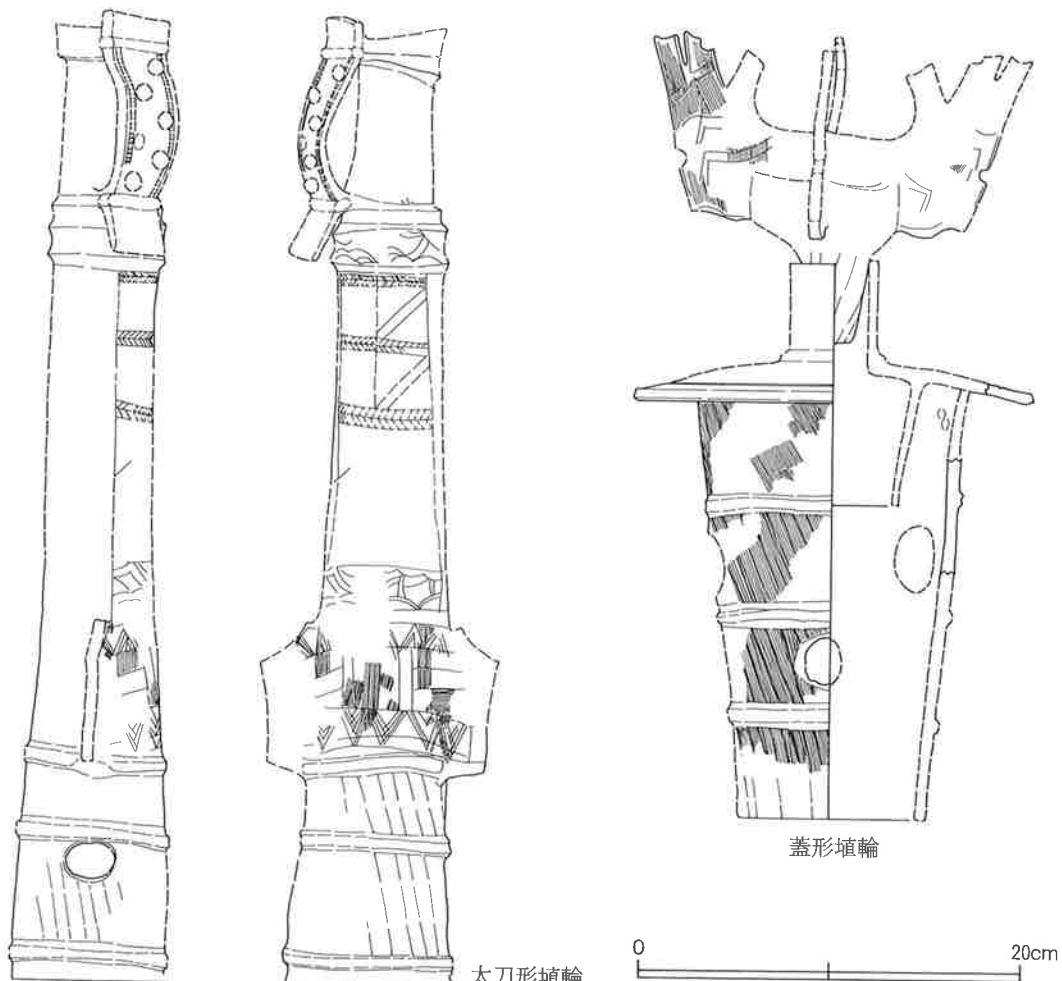


円筒埴輪 2



朝顔形埴輪

第8図 鞠形埴輪・盾形埴輪等実測図 ($S = 1 : 8$)



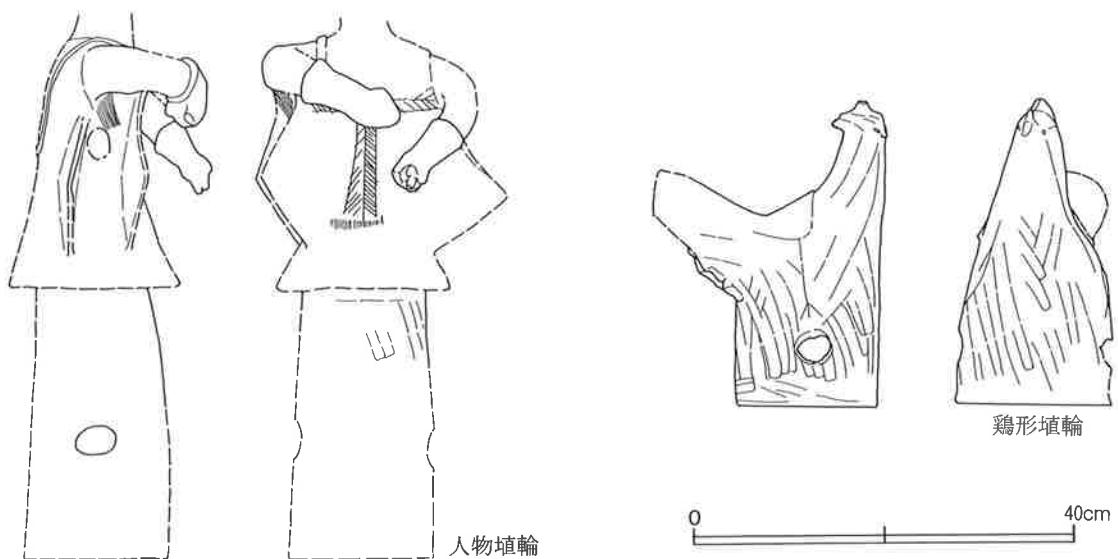
第9図 太刀形埴輪・蓋形埴輪実測図 ($S = 1 : 8$)

太刀形埴輪

把部と鞘部のなかほどの大半を欠失しているが、全体のバランスから高さ約1mほどの高さに復原される。本来、把部には匂金がついていたと思われるが欠損している。鞘口の近くには突帶を巡らせ、その下に波状文等の線刻がなされている。この太刀で特徴的なのは、突帶を二重巡らす基底部の直上に貼り付けられる突起物である。これは盾形を想定したものといわれ、盾形によくみられる鋸歯文や、その間を埋める直線文が線刻によって刻まれている。

蓋形埴輪

円筒埴輪に、笠部と立ち飾り部をのせる蓋形埴輪である。基底部は三本の突帶でほぼ均等に区画される円筒形で、中二段に円形の透しを穿つ。笠部は大半を欠失しているが、あまり弧を張らず、直線的になる形態を示し、助木飾りも施されないものと推定されている。立ち飾り部には線刻が施され、その突帶は強調されるかのように、枝分かれしている。高さ82cmに復原される。



第10図 人物埴輪・鶏形埴輪実測図 ($S = 1 : 8$)

人物埴輪

頭部を欠損しているが、その特徴的な着衣から「巫女」と判断されている。首には丸玉飾りを付けていたと推測され、復原されている。前方に出す腕には籠手状のものをはめる。「意須衣」と呼ばれる巫女特有の上衣は、幅の広い布を右脇下より左肩、右肩とまわし、左脇下で輪をつくり、また右肩へ戻り、最後は右脇に戻らせるもので、八の字状に広がるこの資料も右脇に輪があり左脇を開いている。この上に襻がけを粘土紐で表現し、意須衣正面にT字状に結び緒をしめている。基底部は円筒形で、わずかに下部が広がる。

巫女としての表現方法は、畿内に普遍的に見られるものとされ、頭部は「島田髻」を結っていたものと推測される。しかしながら、「弓」を所持する点では類例がなく、「武具を持つ女性埴輪」として注目される。高さ90cmを測る。

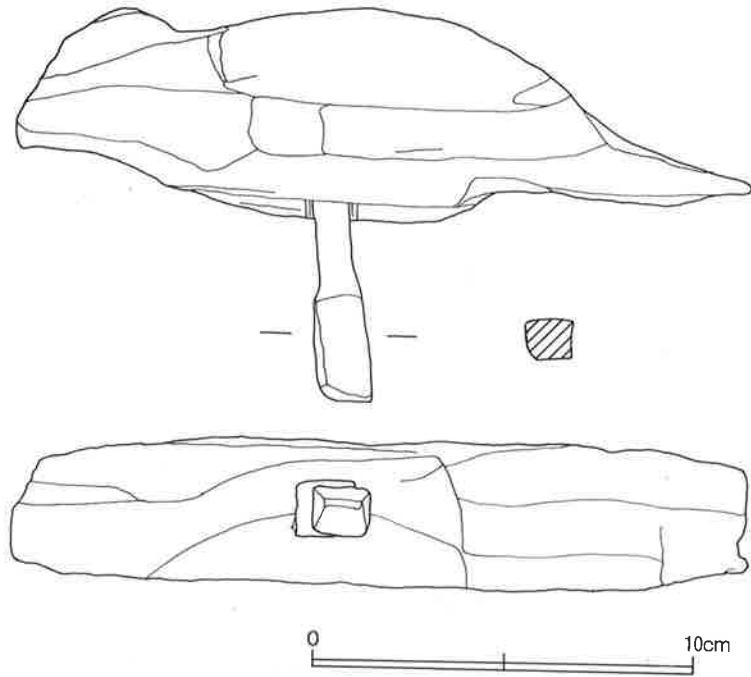
復原の可能は人物埴輪は、この1点であるが、この他に鞆を背負った男性埴輪の一部が出土しており、狐塚5号墳からは2点の人物埴輪が出土したことになる。

鶏形埴輪

円筒部に直接本体をのせるもので、高さ30cmを測る。うずくまる形になり、脚部は円筒部に装飾されている。頸部はまっすぐに立ち上がり、その端に鶏冠をつけ、目を刺突によって表現する。尾は後方に大きく広がるようである。

鳥形木製品

全長19.2cm・高さ5.6cm・厚さ3.8cmを測る鳥形木製品。胴部の下方に断面約1cm四方の角材が差し込まれている。



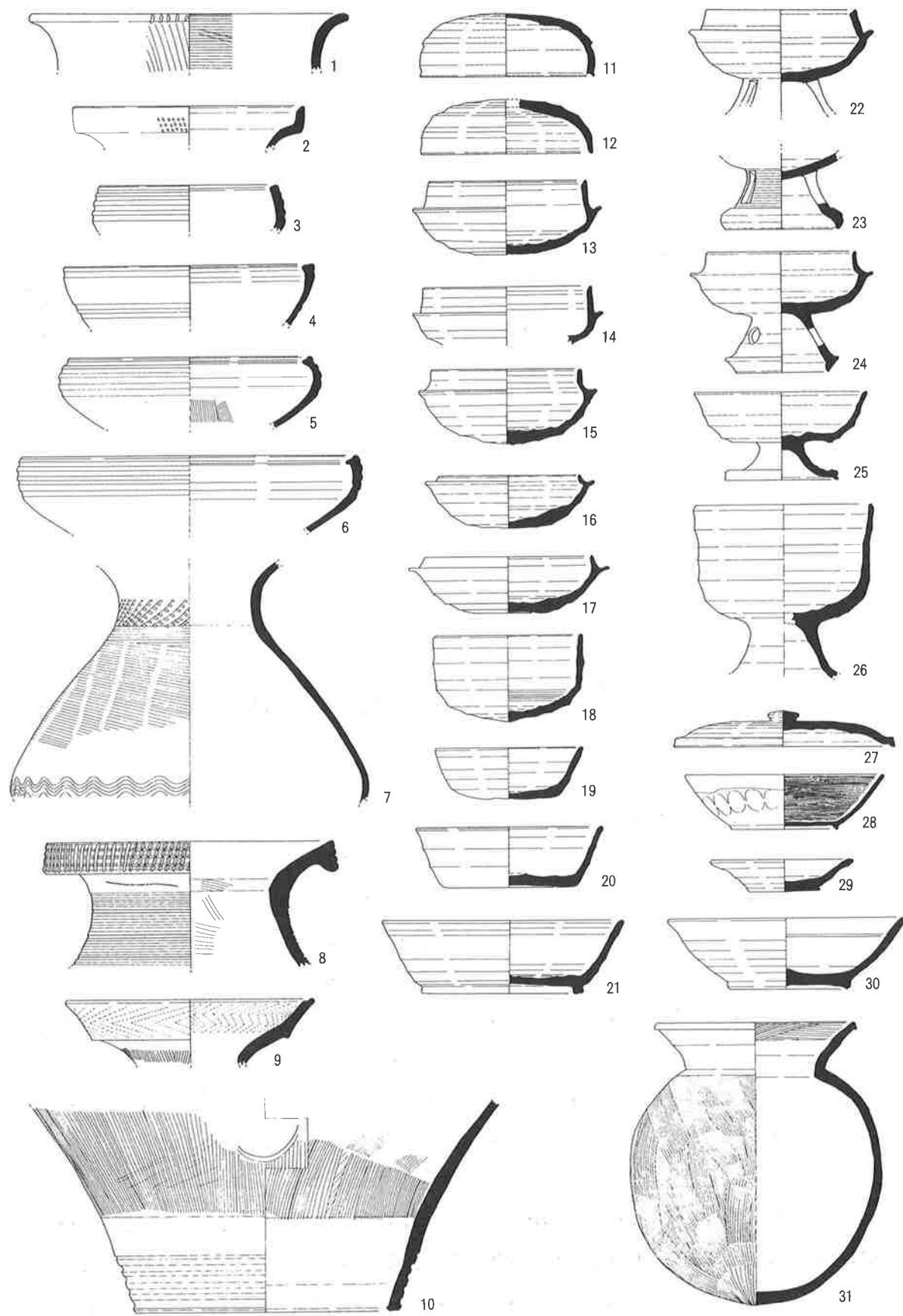
第11図 鳥形木製品

第5章 狐塚遺跡の出土遺物

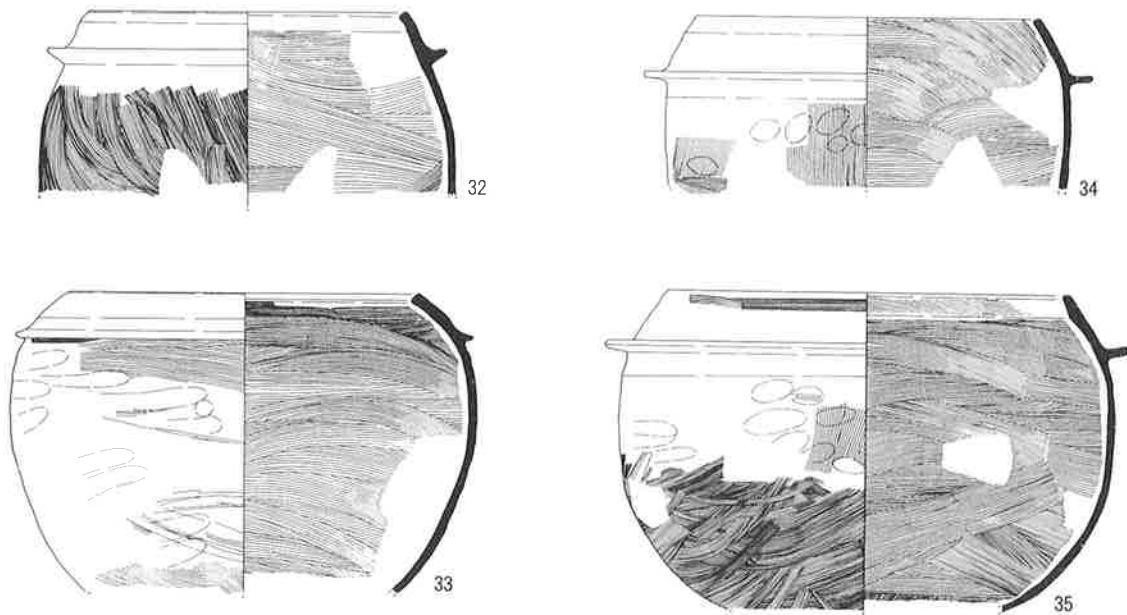
狐塚遺跡の調査からは、様々な時代の遺物が出土している。これらの資料については、近い将来に正式な報告書を刊行する予定であるが、ひとまず遺跡をとりまく年代観を周知していたく意味で、一部の遺物を紹介したい。

(1)～(7)と(10)は、弥生式土器。(1)は、外反する口縁をもつ甕。(2)は、受口状口縁を持つ近江型の甕。肉厚の器壁を呈しており、口縁部の外面に刺突列点文が回る。(3)～(6)と(10)は、凹線文系の土器。中期の土器として、簾状文の土器は含まれないが、凹線文系の土器が含まれるのが北近江の特徴。(7)は、東海系の壺。最大径が体部の下半によっている。近江地域の中前期の方形周溝墓に供献される最もボピュラーな土器。(8)と(9)は、古墳時代前期の土器。(11)・(12)・(27)は、須恵器の杯蓋。(13)～(21)は、須恵器の杯身。幅広い年代差が示される。(22)～(26)は、脚台を伴う土器。(28)は、黒色土器。北近江地域における出土例は少ない。(29)は、灰釉陶器の皿。(30)は、山茶碗。(31)は、土師器の小甕。(32)～(35)は、瓦質土器の羽釜。

弥生時代の資料は、方形周溝墓の年代を示すものとなる。古墳時代前期の資料は、集落を回る大溝、須恵器の一部は狐塚古墳群の年代を示すものであるが、古墳に伴った出土ではない。7世紀代の須恵器と10世紀の灰釉陶器については、隣接する法勝寺に関連する資料と考えられ、山茶碗は南北地割の遺構に伴う資料と推測される。



第12図 狐塚遺跡出土遺物（1）(S = 1 : 4)



第13図 狐塚遺跡出土遺物（2）（S = 1 : 6）

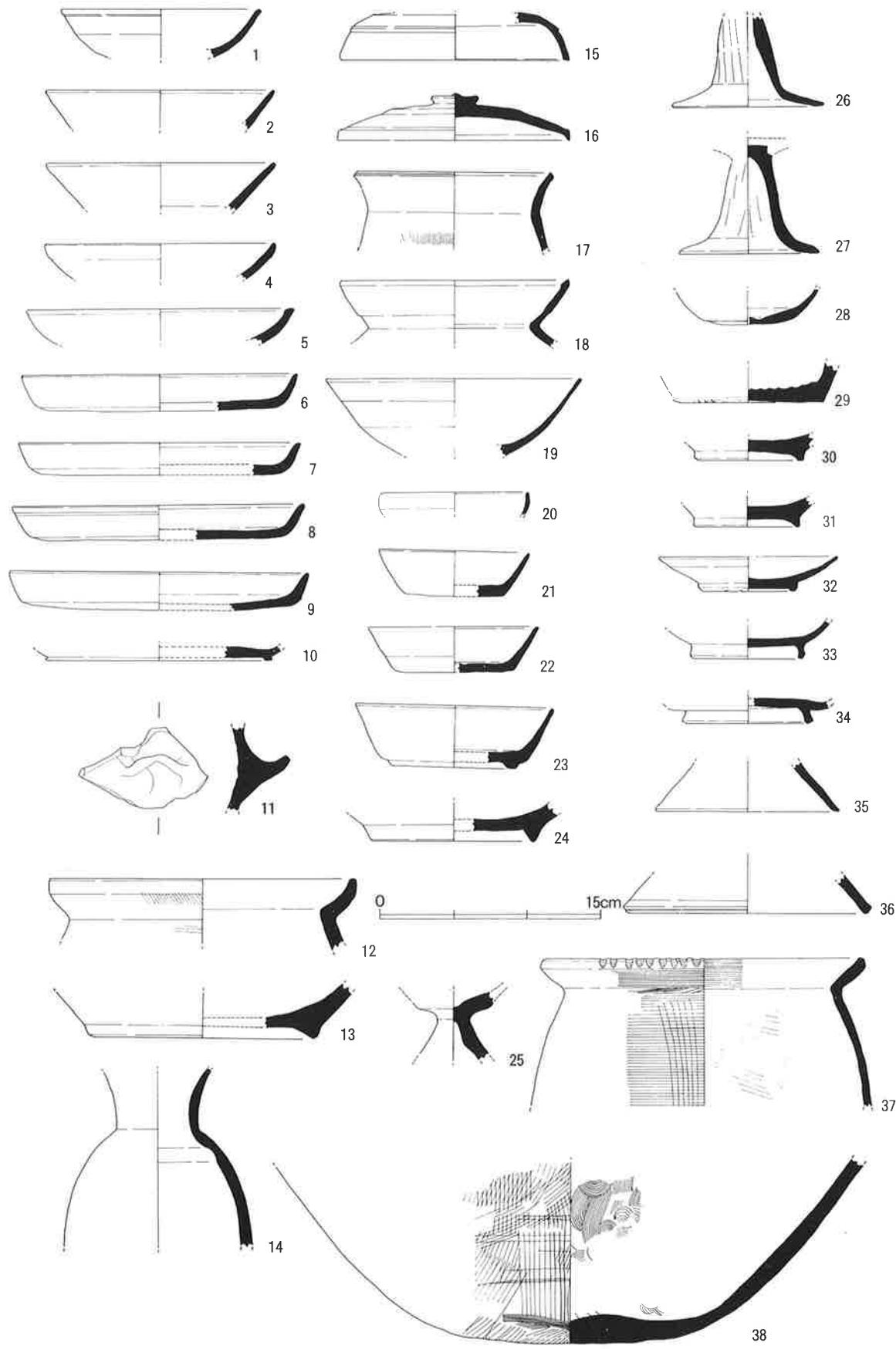
第6章 第4次発掘調査の概要

第4次発掘調査は、1995年4月21日より5月12日までの期間で実施した。この調査は、店舗用地造成工事に関連したものであり、狐塚遺跡の南東端部の調査を対象とした。

調査区は、第2次発掘調査において狐塚5号墳が確認された地点の南側に隣接しており、古墳群の拡がりの確認に主眼が置かれたが、古墳に関連する遺構や遺物は確認されず、他の時期の遺構と遺物が確認され、法勝寺遺跡群の一画を調査した結果となった。

滋賀県教育委員会が第1次発掘調査を実施したおりに、古墳群の南側が地形的に落ち込むことが明らかとなっていたが、今回の調査においても同様の結果となった。しかしながら、この南側に傾斜した落ち込み内には、各時代の遺物が含まれ、調査区の東半部では安定した遺構を伴うことも判明した。第14図に示したものは、落ち込み内より出土した遺物である。

(1)～(3)は、古墳時代の土師器の高杯。(25)～(27)・(35)・(36)が脚部に該当する。(15)は、古墳時代の須恵器の杯蓋。狐塚遺跡の包含層からは、多くの須恵器が出土しているが、狐塚5号墳に伴う須恵器はないとしている。(4)は、土師器の椀の口縁部。(5)・(12)は、土師器の甕の口縁部。(6)～(9)は、土師器の皿。(10)は、高台を持つ須恵器の杯身。(11)は、土師器の



第14図 第4次発掘調査出土遺物

甕の把手。(13)・(24)は、高台をもつ鉢の底部。(14)は壺。(16)は須恵器の杯蓋。(23)が杯身。(17)が土師器の小甕。(18)は、古墳時代の土師器の甕の口縁部。(20)は、ミニチュアの椀。(21)・(22)は、須恵器の杯身。(28)は、土師器の小甕の底部。(29)は、須恵器の壺の底部。(30)・(31)は、山茶碗の底部。(32)は、灰釉陶器の小皿。(33)は、灰釉陶器の椀。(34)は、灰釉陶器の皿。(37)は、土師器の甕。(38)は、須恵器の大甕の底部。

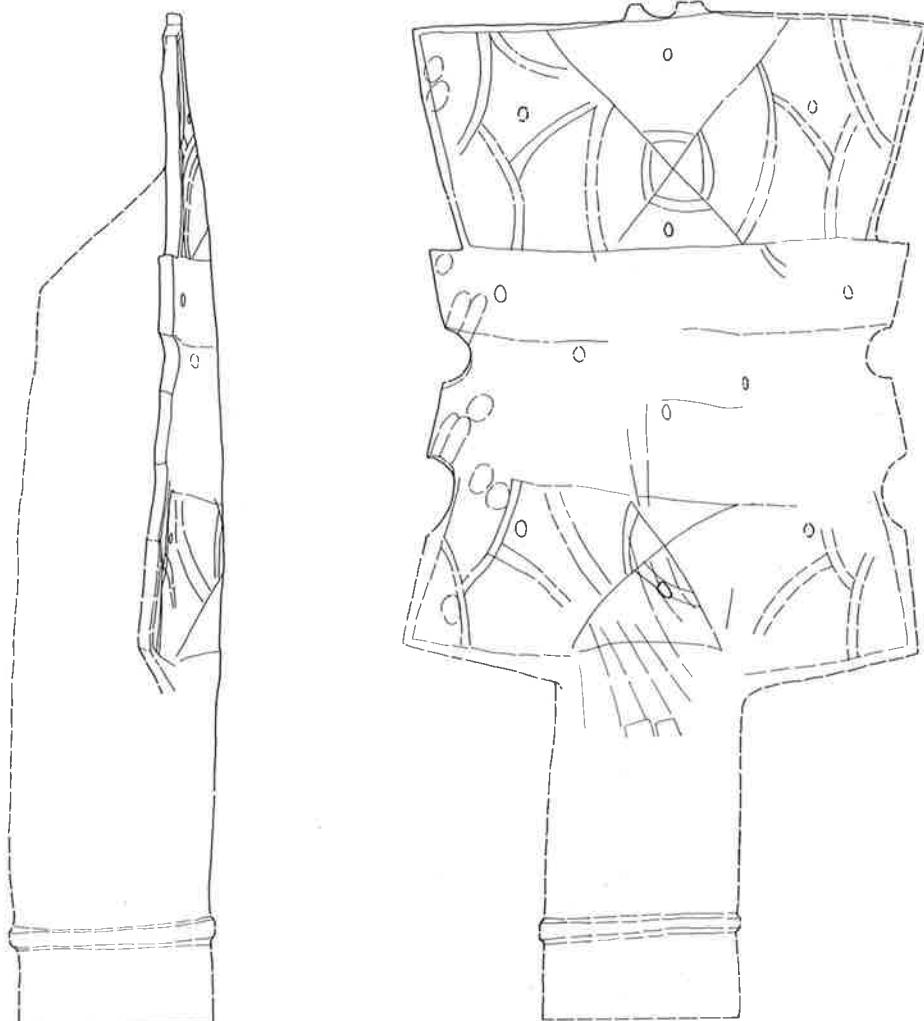
以上の資料は、古墳時代の須恵器と土師器、平安時代前期の須恵器と土師器、平安時代後期の山茶碗の3時期の資料の大別できる。狐塚遺跡の初限にあたる縄文時代早期の資料を確認することはできず、当該地以北に分布することが明らかとなった。また弥生時代中後期の方形周溝墓についても、狐塚遺跡の第1次調査・第2次調査の調査区を南限とするようで、落ち込み上のある第4次発掘調査の調査区へは拡がらないことが明らかとなった。ここで構成される方形周溝墓の墓域は、法勝寺遺跡の各調査区から検出した遺構を含み、これまでに100基を越える遺構が調査されている。古墳時代の資料については、土師器の出土が注目され、集落遺構が周辺に存在することが推測される。また平安時代前期の遺物については、第2次発掘調査の調査区からも多量に出土しており、付随する遺構の決定が急がれる。平安時代後期の資料については、大型の建物遺構と水田区画の遺構が伴うものと思われる。

第7章 まとめ

狐塚遺跡の調査は、調査原因が民間開発であったこと、調査体制が不充分であったことにもまして、出土資料が膨大であったことが整理作業の進捗を停滞させる結果となった。発掘調査から数年間続いた整理調査において、調査の中心となったメンバーは、精力的に作業を進め、多くの資料整理を成し遂げている。近い将来に、この成果を正式な報告書の形で公表したいと考えているが、ひとまず狐塚5号墳に関連する遺構図と、器財埴輪の実測図を公開することで、狐塚遺跡への理解を求めたい。

狐塚遺跡は、多時期の遺構が複合する「法勝寺遺跡群」の中に位置する。このうち6世紀の前葉から中葉にかけて5基の古墳で構成されるものが、狐塚遺跡の性格となる。古墳の中では、第2次発掘調査で確認された狐塚5号墳が最も古く、これに第1次発掘調査で確認された狐塚1号墳が追随する。この2つの古墳からは、円筒埴輪と器財埴輪が出土している。これら狐塚遺跡の古墳は、横山丘陵南端尾根と裾部を中心に分布する「息長古墳群」に含まれるものであり、東西に主軸をとり、東側に後円部を置く共通した平面形を備えている。

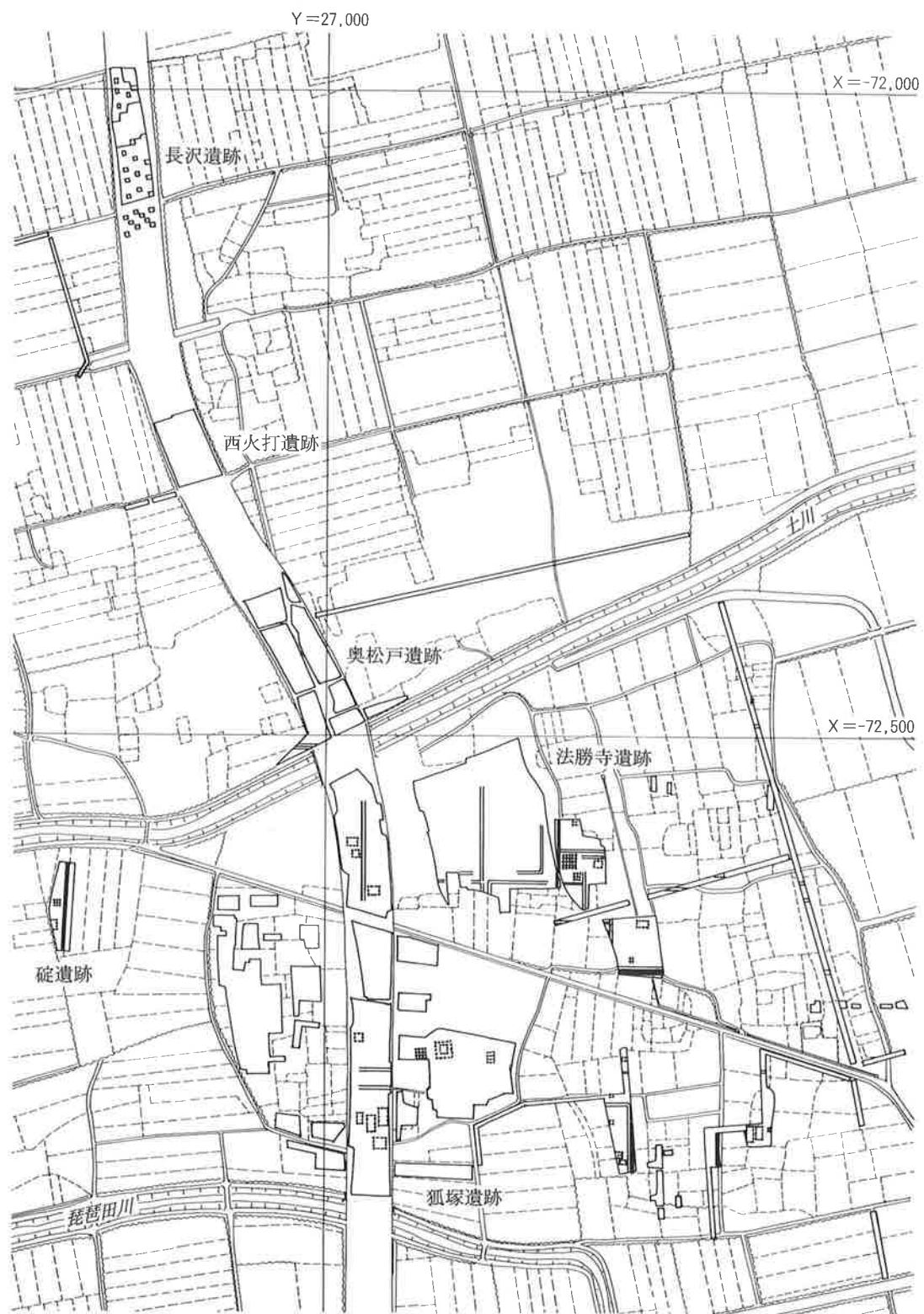
器財埴輪については、狐塚5号墳のバリエーションが最も多種であり、二様の家形埴輪を備



第15図 塚の越古墳出土石見型盾形埴輪 (S = 1 : 4)

え、鞠形埴輪と鶴形埴輪を残すことが特徴といえる。家形埴輪には、塚の越古墳に見られる堅魚木は無く、石見型盾形埴輪も加えられていない。器財埴輪の構成のみを見ると、塚の越古墳に先行する古墳と思われがちであるが、円筒埴輪が塚の越古墳出土例よりも退化し、「断続ナデ技法」も一部に加わることから、これに後出することが明らかである。

また狐塚遺跡からは、法勝寺遺跡群内を広範囲に拡がる「区画水田と管理建物群」が確認されている。第16図に示した資料が、これである。一般に法勝寺遺跡群は、土川の形成する未発達な扇状地に立地する遺跡と捉えられているが、実際に足を運ぶと、起伏に富んだ水がかりの悪い地勢であることが判る。周辺地に条里制が普及した後も、荒地として残された一帯に独自の区画水田を設定し、水利を引き込んだ開発が、この遺構によって語られよう。この開発については、今後慎重な検討が必要とされるが、『故太宰師親王家遺跡臨川寺領等目録』(天竜寺文書)にみられる「朝妻荘法勝寺郷」が挙げられる。法勝寺郷は、十二条郷・十三条郷と共に、当莊本家職を法勝寺とし、亀山院-昭慶門院-恒明親王-臨川寺と伝領された後、自立したとされる荘園である。今後の調査によって解明されることが望まれる。



第16図 法勝寺遺跡群に見られる南北地割と建物遺構 ($S = 1 : 5,000$)

図 版



狐塚遺跡第2次発掘調査全景



狐塚5号墳全景

圖版二 狐塚5號墳出土埴輪



近江町文化財調査報告書第19集
近江町埋蔵文化財調査集報 2
—狐塚遺跡発掘調査報告書—

1996年3月

編集・発行 近江町教育委員会
〒521 滋賀県坂田郡近江町顔戸488-3
☎0749-52-31111

印 刷 有限会社 真陽社